

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)
分担研究報告書

後縦靭帯骨化症患者の自由記載内容からみた診療への示唆

研究協力者 藤原奈佳子 人間環境大学看護学部・大学院看護学研究科教授

研究代表者 大川淳 東京医科歯科大学大学院整形外科学教授

研究要旨 後縦靭帯骨化症患者が記述する日常生活動作における痛みやしびれの症状を回避する方法について、診療にかかわる医師の認識を把握し、診療への示唆を得ることを研究目的とした。日常生活動作における症状の回避方法の例として、平成 22 年度報告書で公表した 3 つの動作における 110 項目を用いた。対象は班会議参加の医師とし、41 件の回収（回収率 39.4%）があった。回答者の過半数 21 名以上が「はじめて知った」項目は 5 項目であった。こうした自由記載内容の分析により、患者の日常生活の背景をイメージしやすくなり、患者への信頼関係の構築や診療効果をあげることが期待できる。

A．研究目的

後縦靭帯骨化症患者が記述する日常生活動作における痛みやしびれの症状を回避する方法について、診療にかかわる医師の認識を把握し、診療への示唆を得ることを研究目的とした。

B．研究方法

日常生活動作における症状の回避方法の例として、平成 22 年度に本研究班で実施した全国脊柱靭帯骨化症患者家族連絡協議会所属の患者会員を対象（分析対象 906 名）とした郵送法質問紙調査の結果として公表¹⁾されている資料を用い、次の 3 つの動作に視点をあてた患者自らの症状回避方法についての自由記載内容 110 項目（動作 1. 路面や道路に砂利や点字用ブロックなどで凹凸がある場合の回避方法（30 項目）、動作 2. 市バスの発車・停車時の急な揺れやタクシー・乗用車のドアを閉める際の衝動の回避方法（40 項目）、動作 3. 駅の階段での昇降での危険回避方法（40 項目））について

質問紙調査を実施した。

これらの患者が記載した内容 110 項目のそれぞれについて、「病態像から予想がつく」、「はじめて知った」、「その他」のいずれかの該当箇所にチェックを記すこととした。

質問紙の回答は、厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等克服研究事業(難治性疾患政策研究事業)「脊柱靭帯骨化症に関する調査研究」班 平成 27 年度第 2 回班会議に参加した医師に依頼した。回答は無記名で会場に設置された回収箱に回収した。

（倫理面での配慮）

人間環境大学研究倫理審査で研究実施許可を得て実施した。

C．研究結果

回収率は 39.4%（質問紙配布数 104 件、回収 41 件）であった。回答者の整形外科における経験年数は 1-10 年が 8 名、11-20 年が 18 名、21 年以上が 14 名、記載なしが 1 名であった。経験年数の平均値（±標準偏差）は 17.8 年（±7.9 年）（最小値 1 年～最

大値 33 年) (n=40)であった。

表 1 から表 3 に「はじめて知った」の頻度が多い項目順に示した。回答者の過半数 21 名以上が「はじめて知った」項目は、次の 5 項目であった。動作 1 (表 1) では、「どうしても時はつま先だけで歩く」、「おしりを持ち上げる。体をうかせる」、「車いすのペダルに足を置かない」、「常にエアークッション付のサンダルを使用」、動作 2 (表 2) では、「線の上を歩かない」であった。

整形外科医の経験年数との関連が有意 (χ^2 検定、 $P<0.05$) であった項目は、動作 1 (表 1) のうち「平らな道路でも両足ひらが痛いので、ひたすら我慢」について「はじめて知った」割合は、経験年数 1-10 年群が 0 名(0%)、11-20 年群が 3 名(16.7%)、21 年以上が 7 名(50.0%)、「痛みのない方の足に体重をかける。ゆっくりと路面に足裏がしっかりつく様にして歩く。」が同様に 0 名(0%)、1 名(5.6%)、5 名(38.5%)であった。動作 2 (表 2) のうち、「車の運転中に起こる(凹凸の発見時に前傾・横傾する)」が 0 名(0%)、1 名(5.9%)、6 名(46.2%)であった。これらの項目では、経験年数が少ない群で「はじめて知った」割合は低率であった。動作 3 昇り(表 3-1)のうち、「物を持たない。少し声を出して歩く」と「前方上方を長く見つめると気分が悪くなるので、あまり前方を見れないので音に注意する」で経験年数との関連が有意であったが、経験年数 11-20 年群で最も低率であった。

D . 考察

後縦靭帯骨化症患者が、日常生活動作を行う際に、痛みやしびれをどのようにして回避しているかについての医療者側の認識

に関する研究はみあたらない。

今回の調査では、患者が自由記載欄に記載した内容を医師への質問項目として用いたため、表現が不十分で解釈が困難な記載事項もあり、回答者の判断が困難であった項目もみうけられた。

本研究班で平成 23-24 年度に実施した後縦靭帯骨化症患者を対象とした質問紙調査²⁾では、「介助してほしいが自力でしている」者の割合は、階段下りで回答者 757 名のうち 19.2%と最も多く、次いで階段昇りが 759 名のうち 16.9%、歩行が 784 名のうち 12.8%、着替えが 797 名のうち 12.7%であった。これらの結果を今回の自由記載内容とあわせると、痛みやしびれの症状があっても麻痺がなければ、動作は可能となるため、患者本人が「ひたすら我慢」するか、症状を緩和させる方法を工夫して生活していることがうかがわれる。

3 つの動作を通して、足底部が地面と接触することによる異常感覚についての医師の認識が不十分である傾向が得られた。また、110 項目のうち、3 項目については医師の経験年数が少ないほど「はじめて知った」割合が有意に低率となった。しかし、これらの有意性については、41 件の回答者からの結果であるため、結果の信頼性については、保証しにくい。経験者ほど「知る」という状況を厳格にとらえて「はじめて知った」という回答を選択したとも考えられる。

E . 結論

慢性の痛み、しびれに対処して生活してゆくための患者の工夫を臨床医が具体的に認識することにより、後縦靭帯骨化症患者の診療に際して患者の日常生活の背景をイ

メージしやすくなり、患者への信頼関係の構築や診療効果をあげることが期待できる。

文献

- 1) 藤原奈佳子、竹下克志：痛みと通院に関する調査研究、厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 脊柱靭帯骨化症に関する調査研究、平成 22 年度総括・分担研究報告書（主任研究者：戸山芳昭（慶應義塾大学）、pp.78-83、2011.3
- 2) 藤原奈佳子：後縦靭帯骨化症患者の日常生活動作とその支援に関する研究、厚生労働科学研究費補助金、難治性疾患克服研究事業、脊柱靭帯骨化症に関する調査研究、平成 25 年度総括・分担研究報告書、pp.23-28、2014.3

F．健康危険情報
なし

G．研究発表

- 1.論文発表
なし
- 2.学会発表
なし

H．知的財産権の出願・登録状況
（予定を含む）

- 1.特許取得
なし
- 2.実用新案登録
なし
- 3.その他
なし